
MOON-4 夜叉 4 < 2 5 >

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 4 < 2 5 >

【Nコード】

N 2 6 6 8 N

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

和人は目覚めた。つかの間の平穏が訪れる。

夜叉 最終章です。

1 月夜（がつや） - 1（前書き）

いよいよ最終話突入です。

1・月夜（がつや） - 1

私はここよ。

ここでずっと貴方を待っていたんだから。

一人の青年が抱いた青年の前で俯いている・・・
何が哀しいの？その人は誰？

その桜の樹の下に横たわっている青年に、片膝を付き俯いている青年はもう何時間もそこにいた。

私の桜の花弁の下に横たわっている青年を、じっと見つめたまま動こうともしない。

この人たちが私の『待ち人』？
とても強い血エナジーを持っているわ。

この人たちが私を蘇らせてくれるの？
でも、違う。

彼らは『運命』で繋がっている。

夜空は満月。

もう幾夜こんな夜を越えて来たのかしら・・・
やがて、片膝を付き横たわる青年を見つめていた彼は、立ちあがった。

その時、一台のバイクが近づいて来た。

そう、あの人が私を助けてくれる人。

ずっと待っていた人。

バイクの青年はバイクを降り、私へと近づいて来る・・・
そう！私はここよ！ずっと貴方を待っていたのだから。

だけど、その人は私の元へは来なかった・・・

どうして？これ程長い時を待っていたのに。

カシャ・・・

シャッターを切る音。

やがて、彼は立ちあがった青年を追うようにして、彼方へと去ってしまった。

どうして？私はここにいるのにどうして気付いてくれないの？

満月・・・桜の花びらが狂ったように舞い散る。

どうして。

そう呟いた時、私の元で眠っていた青年が目を開いた。金色とビリジャン・ビリーを混ぜた様な瞳を持つ、長身の男性。

うつすらと目を開き、私に問いかける。

「お前の望みを叶えてやろうか。」

その青年は言った。

空は青空だった。

薄い雲が彼方に広がっていて彼方で空の青と調和していた。

朝子の家。

和人と夜叉は庭の芝生の上にいた。

芝生の緑も夏の太陽の光に抱かれ、より一層緑が映えていた。

「若も随分な事をしたのお。」

白い着物に緑の刺繍を施した着物を着た夜叉が近づくと和人に振り返りそう言った。

「ああでもない、と、『情報』が手に入らなかったからな。」

「それで我に帝王そなたの血を預けたと。」

夜叉は長い黒髪を風に委ね、「『帝王』を蘇らせるのは『帝王の血』。」

「夜叉にはすまないと思っている。」

白いシャツにGパン姿の和人は、

「だけど、お前なら判ってくれると思った。」

「そうじゃの。」

夜叉は笑みを口元に浮かべた。「我は帝王の側近……右腕となる者。これも『運命』^{さため}。」

「俺はそうは思っていない。」

和人は静かに首を振った。「裕希や朝子を守れるのは、お前しかないと思った。裕希の力になれるのも。」

「……。」

「俺は夜叉を大切に思っている。だから、俺のいない間、『全て』を託せると思った。」

「若……。」

夜叉は目を見開いた。

『もし和人が本当の『帝王』だったら、そんな『運命』なんか誰にも押しつけやしないよ。』

「若。」

夜叉は和人に尋ねた。「どうして我を側近として置く？もし、あの日の闘いで若が九桜に倒されていれば、我は九桜の側近になっていたであろうに。」

黒い瞳が細まる。

和人は微笑した。

「俺には……『帝王』には側近はいらない。ただ一緒にいたいから、いるだけさ。」

「……。」

「何か、不満でも？」

「……いや。」

和人の端正な顔立ちを正面から見つめていた夜叉は初めて視線をそらした。「いずれにせよ、『運命』^{さため}じゃ。」

「夜叉。『運命』^{さため}なんて存在しないよ。」

和人の良く透る甘い声。「運命は自分で作るもの、変えるものだから。俺は夜叉に『側近』として縛り付ける気はない。」

「若……」

脳裏に裕希の姿が浮かぶ。「あの人も同じ事を申しておった。」

「人の子？」

和人は少し迷った末、「ああ……裕希の事か。」

「若は裕希に大分影響されたようだよ。」

微笑む夜叉。和人は長めの前髪を左手でかき上げ、

「かもしれないね。」

そして、秀と朝子の存在。

『帝王』として以外の『生き方』を教えてくれたのは『昼の住人』たち。

「若の言う通り、まんざら人も捨てたものでもないの。」

そして、腰にさした『竜王の剣』にそつと触れた。「あの人もそうであつた。」

「彼か。」

そんな和人の言葉に、夜叉は満足気な笑みを浮かべただけだった。そこへ、

「和人、夜叉！」

白いバルコニーから飛び出して来た裕希が声をかける。「朝子さんがコーヒー入れてくれたよ、おいだよ！」

「わかった、すぐ行く。」

和人は答え、夜叉を振り返見た。「行こう、夜叉。」

「我はF&Mのダージリンが好きじゃ。」

素直にそう答える夜叉。

和人はくすり、と笑い、

「きつと、朝子が入れてくれているよ、F&M。」

2人が去った後には、夏の風が通り過ぎていくだけだった。

1 月夜（がつや） - 1（後書き）

ご感想をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2668n/>

MOON-4 夜叉 4 < 2 5 >

2010年10月22日00時59分発行